

家庭、技術・家庭科研究委員会

1 研究テーマ

一人一人が自ら拓く技術・家庭科の学習
「個々の学びの良さや可能性を伸ばし、友と共に学びあえる技術・家庭科の学習」

2 研究課題

衣服製作を中心に進めてきた中学校の衣生活に関する学習であるが、昨年度行った上高井郡内の実態調査から、着こなし、ファッションへの興味・関心は高いものの、衣服の手入れや修繕は授業での経験が少なく知っていても実生活に生きていないこと、製作においてはつまづくことと教師に頼りがちで問題解決的な学習が不足していることが分かった。このような実態から、相森中学校のめざす子どもの姿「人の良さに学びながら、自分の力で問題を解決しよう」と挑戦する生徒」の育成と、技術・家庭科でねらう「一人一人が自ら拓く学習」から導き出された「主体的に課題を見つけていく生徒」、「自ら考え工夫しながら課題を解決していく生徒」、「生活をよりよくしようと実践していく生徒」の具現に向け本研究を推進した。

3 指導の実際

< 公開研究授業 >

- ・期 日 平成19年11月14日(水)
- ・学校名 須坂市立相森中学校
- ・題材名 「ワーキングウェアの製作、活用、
手入れを通して衣生活を学ぼう」
- ・学 年 2年2組(39名)
- ・授業者 森山 仁美 教諭

学習場面の工夫

ア 気づきと納得の学習場面づくり

手順や方法を始めから示しておくのではなく、生徒に試行錯誤させる場面を仕組み、こうすれば良さそうだ、なるほどそうだったのか、と体験を通して学ぶ技術・家庭科ならではの学習場面を衣服製作においても大切にしたいと考えた。本時にかかわっては、ワーキングウェアのデザインを考えた生徒が裁断方法や材料の有効利用法を考えるために、実物大の紙やリボンを用いて試作する場面を設定した。資料や標本、見本を活用しながら、自分なりに裁断方法を考えさせていく中で、縫い代・縫い方、製作手順といった作業の見通しについても目が向けられていくのではないかと考えた。

授業では生徒は紙を本物の布のように慎重に作業し、体に当てたり巻きつけたりしてサイズを決めるなどイメージを形にしていた。M生とY生は「おー、これポケット?」「あー、ポケットか?つける?」などと最初にポケットを作っていたが、設計ミスがあることが分かった。切ってから短かったという生徒もあり、試作して分かったことが実際の製作に生きる活動となった。時間が終わってももっとやりたいという声があり意欲的な取り組みであった。

イ 課題を明確にし、自ら解決の方法を求める場面の設定

ハーフパンツのポケット付けの場面では、曲がらないようにつきたいと願うA生は定規で線を引き、練習布で何度も試していた。またB生は説明書や実際のエプロンを観察し、ポケット位置の印に気づき追究を深めていった。このように自分の願いに照らし合わせながら、どのようにすればよいか考えさせることで、教師に頼らず生徒自らが資料や標本などを活用して解決方法を探ることができた。ワーキング

ウェアの製作では、デザインがさまざまであるため、製作手順や方法も一人一人違ってくる。生徒それぞれの持つ願いやこだわりを大切に、それを実現させるために生徒自らが解決方法を追究することが、めざす子どもの姿に結びつくと考えた。

実物の見本の中に布端のほつれたものなど、デザインの種類に応じて数多くの標本を用意し、追究の手だてとした。手元に標本をおき試作したり、デザインや縫い方を見ている姿があった。また布端の標本を示すことによって、縫い代の必要性を視覚的に理解することができた（K生ら）。

友と共に学び合える場の設定

個別の作業であってもペアやグループの情報交換を積極的に行えるよう、願いや課題別にグループ作りが大切である。ワーキングウェアの製作ではデザインが似ている生徒同士を同じグループにした。主体的に追究し、生徒同士が関わり合いながら、課題を解決する方法や視点が広がっていくとよい。また教師から生徒へと友の学びの良さを、広げていきたい。

グループ毎にかかわり合い、サイズや布の使い方、縫い方などを話しながら追究する姿が見られた。Y生とS生はスカート丈に合わせメジャーでサイズを測り合い、「上はこんなに長なくていい」「上を折っても使えるのがいいな」「よく測ろう」「やっぱり25cmだね」と話しながら進めていった。また、終末で教師が布端の糸のほつれに気づいた生徒の良さを取り上げ、学級の仲間全体の学びとして共有していた。

衣生活の自立のための題材選定について

実態調査に基づき、まず基礎基本の定着が出来る題材であること、自分らしさを追究できる題材であること、製作から活用・手入れを含めて展開でき学習に主体的に取り組める題材であることといった視点から題材を選定した。ワーキングウェアはエプロンのように同一のデザインではなく、共通の材料を自由に使いデザインすることが可能で、願いを大切に自分らしさを追究できる。また、他教科の活動や学校生活、家庭でもさまざまに活用することができるので、生徒の実態に合った題材といえる。

4 この事例から明らかになったこと

- ・資料や標本、実物作品などを数多く用意し、その後の学習を見通せる試作の場面を仕組んだことで、これまでの教師主導型の授業から生徒が自ら製作手順や方法を追究する製作学習へと変換することができた。製作の過程でも「何を見たらいい?」と聞いてくるなど分からないことを自ら解決しつつ意欲的に取り組んでいる。
- ・デザインの似ている生徒同士のグループを作ったことで、共通の課題についてお互いに関わり合って追究することができる。
- ・自分の気づかなかった視点や方法について、全体の場で知り、学びを共有化することで、次の学習で活用できる力となる。
- ・ワーキングウェアに90cm四方の正方形の帆布を使用したことで、自由にデザインを考え、自分だけの作品が作れる喜びや楽しさが感じられる。また友と布の交換をして配色を考えるなどさまざまな工夫も見られた。

5 来年度への課題

- ・友だちの作品を見たり、一緒に追究せざるを得ない場面を作ったりするなど、友と学び合う場を工夫して、友だちと一緒に学ぶ楽しさを感じさせる場面をつくる。
- ・生徒に任せて活動を進める場面では、何について追究させるかをしぼって、具体的な見通しを持てる場面を設定することも必要である。
- ・新しい題材での実践を踏まえて、衣服の活用と管理を含めた題材展開を考えていく。

